

『類聚名物考』について

山田直子

『類聚名物考』は、江戸中期の国学者山岡浚明(1726～1780)が著した類聚編纂物で、宝暦年間に起筆し、安永9年(1780)に編者が没するまで書き継がれたものと考えられている。年次が記された最も早い時期は、宝暦10年(1760)4月(巻295和歌部「宇治拾遺物語考 宝暦庚辰年卯月」)である。自筆本は失われ、巻数は伝本により異なるが、朽木文庫所蔵本を最善本として活字化した井上頼圀・近藤瓶城校訂本(7冊 近藤活版所 明治36～38年刊)では395巻となっている。この活字翻刻本は、1974年に歴史図書社から復刊され、近世文学研究に資する工具書として広く用いられている。事実を考証した記事は、歴史学の分野でも参照されており、例えば最近の研究成果として、近世初期から幕末に至るまで寺院への駆け込みが行われ、赦免がなされていたことが明らかになったが、この事実と対応する「寺入」の記事が『類聚名物考』に見出されると指摘されている。(1)

『類聚名物考』が引用する書目は、古事記六国史以下諸家の記録、物語、歌書、前後漢書、白虎通、淮南子、列子、白氏文集、無量寿経、法華経、一切経音義等で、和漢書、仏書を博搜して編まれたものである。分類項目としては、

天文 時令 神祇 仏教 人物 地理 姓氏 称号 武備 弓矢 人事 身体 心情 言語
飲食 病痾 政事 宮室 装飾 船車 調度 書籍 文史 声音訓読 和歌故事 和歌
歌天爾遠波 楽律 薫香 故事 凶事 雑

の32部門を立て、最後に「甲陽軍艦拔萃」「世諺書拔萃」「京羽二重拔萃」を附している。

江戸後期の大部な類書として知られる屋代弘賢(1758～1841)の『古今要覧稿』は、『類聚名物考』を先蹤として編まれており、『古今要覧稿』岩崎文庫蔵本の凡例中に次のように言及されている。文中の隅東先生は山岡浚明(明阿)の門弟奈佐勝皐のこと、足水軒は片山誠之である。

凡此書編集のきざし十余年の前に在。或時隅東先生に此素志をかたる。先生曰吾師明阿弥陀仏、平生の筆記三百余巻有。あらかじめ冊子を儲、部門を分ち、得るに随て、写し入、類聚名物考となづけて忽忘に備ふ。今は足水軒が所に有。是を得ば、纂集の労を省べきこと多からんと。僕これを聞、すみやかに足水に就て、これをかる。寔に明阿師の業勤たりといふべし。然れども其記する所、野史家乗に専にして、正史実録に及ばず。これを如何にといふに、壮年の時、一老人の教に従て、以前の筆記を破りて偏に記憶せんことをつとむといへども、暗記しがたくして再び書する所、即これなりとぞ。僕これを得て、雀躍にたへず。ことごとく取て要覧に入。抑僕の学業おほく隅東先生の啓発によれり。明阿師の此志、僕を俟て成るに至る。自らこれ偶然ならざるに似たり。

寛政十年九月廿一日

源弘賢 識 (2)

ここで述べられている記憶することの難しさや、部門を分かち書写するという編纂の方法について、山岡浚明が門弟にのこした著述『示蒙抄』には以下のように記されている。

強識の人は一たび見聞するにのち是を暗記す。亡失おほき人は再三にいたりても猶或は記憶することあたはず。是幸不幸の甚しき歎くに余り有といへども其性質に係れば、また是を如何ともすべからず。たゞ力を尽し思を覃ぼして努まなぶべし。抄写は学問の一かたなるよしを古人もいへれば、これをつとめ事とせよ。抄写ことに法あり。豫て部門をわかち、凡例を立て、用に随て即ち出んことを要とすべし。得るに従て漫書し既に巻数をなしては、みづから用をなさざるに帰す。努て慎べし。是学者帳中の最秘なり。(3)

この分類し抄写するという浚明の方法について、中野三敏氏は次のように指摘する。

宝暦の末ごろから浚明は一つの大きなライフ・ワークとでも言うべき仕事に手を染めていた。即ち『類聚名物考』の著である。伊藤東涯の『名物六帖』辺りに刺激されたに違いない浚明のこの仕事は、後年門弟の奈佐隅東に書き与えたと思われる『示蒙抄』に示される通り、明らかに名物学とでも言えるだけの体系を意識した書きぶりであり、友人の萩原宗固等が示した同様の著述等とは比較にならぬ程整備されたものでもあった。(4)

近世前期に中国最大の類書『古今圖書集成』が舶載されて、清朝考証学や名物学の重要性が認識されたとされており、『類聚名物考』(別名『名物類聚』)もその影響を受けて編まれたと考えられる。山岡浚明は明確な方法意識をもって分類体系を構築しているが、ここで対比されている同時代の歌学者萩原宗固の場合は、大田南畝の『一話一言』に「翁和歌をよくし和学に精し、自ら抄写する所数千百巻に及べり。」(5)と評されながら、その著述は雑抄の域を出なかった。萩原宗固の著述のうち抄録を主とする雑抄の類について、安藤菊二氏は次のように述べる。

この雑抄は、読書の次、興味ある語彙は遭遇するたびに抄出しているので、興味深い部分も多いものの、索引にまで手がおよんでいないので、検索には甚だ不便で、現状のままでは利用することができない。この点、山岡明阿が、『示蒙抄』において、抄書は分類して行うように忠告し、早くに『類聚名物考』を纏め上げているのと比較して、格段の差のあることを認めざるをえない。(6)

抄写することが学者の読書の要であるならば『類聚名物考』や『古今要覧稿』は壮大な読書記録とも言えるだろう。『類聚名物考』に見られる博引旁証の学風は、記憶だけによるのではなく、学者の読書のありかたと深く関係している。この点については、久松潜一氏が古典学者契沖の本文校訂に関して述べた次のような見解が示唆的である。

契沖の『万葉代匠記』その他に出典が極めて豊富なのは記憶力の強いことにもよろうが、常に新しい書籍を書写・校合したことの結実であろう。彼の随筆の『河社』や『円珠庵雑記』『円珠庵雑々記』などは古典籍を書写・校合した際の備忘録というべき性質が多いのである。(7)

『類聚名物考』や『古今要覧稿』のような類書は、学者が書写・校合しながら読書した副産物である抄録や備忘録を、検索に便利なよう体系化した書物と見ることもできる。『古今要覧稿』凡例に語られている「限ある人才を以て、限なき書籍を読尽すことあたはず。若よく読尽す人有とも、よく記憶すること能はず。若く記憶する者有とも、唯一己の覚悟にして後世に賜ものする事あたはず。」(8)との思いがこれらの類書を編纂させたと言えるのではないだろうか。

註

(1) 神田千里『日本の中世 11 戦国乱世を生きる力』中央公論新社 2002 p128

(2) 『古今要覧稿』第1巻 原書房 1981 p4-5

句読点は私に付し、通行の字体を用いた。

(3) 『示蒙抄』の引用は東京大学総合図書館蔵本により、私に句読点を施した。30丁オ

(4) 中野三敏「山岡浚明 健全な戯作精神」

『十八世紀の江戸文芸 雅と俗の成熟』岩波書店 1999 p210

(5) 『日本随筆大成』別巻1 吉川弘文館 1978 p87

(6) 安藤菊二「萩原宗固の著作について」『江戸の和学者』青裳堂書店 1984 p46

(7) 久松潜一『契沖』人物叢書 吉川弘文館 1963 p137

(8) 『古今要覧稿』第1巻 原書房 1981 p1